

コミュニケーションをデザインするとは



中岡成文*

What is Communication-Design?

Key Words : コミュニケーションデザイン, 科学技術コミュニケーター
Communication-design, Science technology communication

1. コミュニケーションデザイン・センターの設立

本誌の本年1月号で大阪大学の鈴木直理事・副学長が書かれていたように、大阪大学では教育目標の1つとして「デザイン力」を掲げている。その目標を具体化するべく、本年4月、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター(CSCD)が発足した。吹田、豊中の両キャンパスのいずれでもなく、大阪モノレールの万博記念公園駅の前、万博記念機構ビルの中に居を構えている。このロケーションは、市民の中に飛び込んで「社会学連携」を進めるといふ後述の姿勢を象徴しているようにも思われる。将来的にはJR大阪駅北側の再開発地、いわゆる北ヤードに移るといふ構想もある。

「コミュニケーションデザイン」とは聞きなれない名前だが、何を意味しているのだろうか。それは、専門家と一般市民、利害関心の異なる人々をつなぐコミュニケーション・ネットワークの構想・設計のことである。

なぜ大阪大学にこのような組織ができたのか。先にも述べたとおり、大阪大学では、教養、デザイン力、国際性という3つの教育目標を掲げている。このうち「デザイン力」とは、異なる分野知識を編集し、新たな知的領域を創出できる構成力のことである。対話力育成プログラムなどさまざまな取り組み

をスタートさせ、社会的な判断力とデザイン力を備えた、市民から信頼される人材を育てたいということである。

CSCDの教育事業としては以下のような対象および目標を設定している。1.「思いやり」と確かな社会的判断力をしっかりもって市民と十分なコミュニケーションをとりうるような院生・若手研究者の資質の育成。2. 科学技術コミュニケーションや紛争解決のさまざまなプロセスのメディエーションを行う専門家、たとえば科学技術コミュニケーター(「市民に信頼される科学者」像をめざす)、紛争解決のためのメディエーターの養成。3. 市民・NPOとの「科学研究」を媒介としたコミュニケーション・ネットワークの構築。4. 公共的な合意形成のためのさまざまなコミュニケーション手法の開発。以上の4つであるが、その際の方針としては、研究室・実験室の教育ではなく、現場での教育、問題解決型の教育、チームで動く教育実践、領域横断型教育(文理融合の促進)を掲げている。

2. 文理融合の「コミュニケーション」

以上のような構想のもとに出来た組織であるが、いったいなぜ「コミュニケーション」なのか。

以下のことを述べるにあたって、私が哲学の研究者であることを明らかにしておいた方がいいだろう。長年コミュニケーション論と取り組んでいて、理工系の研究者と、さらには心理学系の研究者との違いを感じるがよくある。コミュニケーションは意思疎通と訳されるが、ただ「疎通」すれば問題解決につながるのではなく、コミュニケーションの裏や陰影や不連続も含めて考えたいと私などは考える。「要素」に還元し、同質化し、操作可能な形にしてよしとするのではなく、異質なものが必死で出会うとして試行錯誤している、その姿や「プロセ



* Narifumi NAKAOKA
1950年7月生
京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学
現在、大阪大学・大学院文学研究科、教授(大阪大学コミュニケーションデザイン・センター長)、文学修士、哲学
TEL 06-6850-5662(研究室)
FAX 06-6850-5836(中岡宛と明記)
E-Mail nana@let.osaka-u.ac.jp

ス」を大切にしたいと思う。これはサイエンスやエンジニアリングと人文学との違いなのだろうか。「文理融合」を謳う場合には、まずこのギャップをしっかりと見つめ、互いの異質なアプローチを味わいつつ接近することが必要であろう。そのような大学内および専門領域間のコミュニケーションを仲介することも、当センターの仕事だと思っている。

科学者・技術者に「社会的判断力」をもってほしい、一般市民とコミュニケーションのとれる人になってほしいというのが、CSCDの願いである。この科学技術コミュニケーション教育を当センターで推進する小林傳司さんが、よく引き合いに出しているのが、「ホウレンソウの遺伝子を組み込んで肉質をヘルシーに変化させた豚」の開発である。理工系の研究者が社会的ニードというものを読み誤る好例だと小林さんは指摘する。なぜか？そんなヘルシーな肉質をもつ豚をわざわざ(遺伝子組み換えのリスク付きで)開発しなくても、その分少なく豚肉を食べ、その分多くホウレンソウを食べる、それで十分ヘルシーではないか——これが普通の人間の感覚である。

何でも作り出せばいいというものではない。作り出すことが少なくともその時点で不適当なものもある。これは大切な「判断力」であろう。理工系の研究者にその意識が欠けているかといえ、そうでもない。設計工学の研究者が、「何もつくらないことも、既にあるものを撤去することさえもデザインの選択肢に含まれる」^[1]と書いているのを見て、私は感銘を受けた。これこそデザインの感覚であり、これを共有すれば「コミュニケーションデザイン」についてコラボレイトすることも有望である。

また、同じ研究者が、現実の複雑で不確実な問題に対応するためには、技術的合理性に根ざして問題解決を図る「システムティックなデザイン」ではなく、状況からの応答や他者からの応答に耳を傾けながら柔軟にデザインを進める「対話によるデザイン」が重要であることを説いている^[2]が、この指摘にも強く共感する。

ただ、他方では、「作り出す」カルチャーの担い手の感覚を無視すべきではないとも私は考えている。「こんなの出来たら面白いね」と言って、ともかく手を動かしてやってみる。その自由なエネルギーな

しには何も生み出されないだろう。そのエネルギーが社会的判断力によって賢明に方向づけられることが、文明の要請である。

3. 人ともものコミュニケーション

当センターには3つの部門がある。これを「コミュニケーション」という言葉に関係づけて説明すれば、次のようになるかと思う。

「臨床コミュニケーションデザイン」部門は、医療・福祉や災害救援のような「人—人」のコミュニケーションに関わる。それに対して、「安全コミュニケーションデザイン」部門は、科学技術やロボットのような「人—もの(環境を含む)」のコミュニケーションに、そして都市環境やアートマネジメントなどに携わる「アート&フィールド・コミュニケーションデザイン」部門も同じく、「人—もの(環境を含む)」のコミュニケーションに関わると言えるだろう。

こうなると、「もの—もの」のインターフェイスにも注目したくなる。これはひとまず理工系の領域に属するように思われ、当センターがこの種のコミュニケーションを扱うのは将来の課題となるかもしれないが、簡単にコメントを付しておきたい。「もの—もの」のコミュニケーションは人を介さずには行われえない。ものは人に対して(「人のために」という言い過ぎかも知れないが)生み出される。しかし、他方で、もの(マテリアル)にはそれぞれ個性があり、階層などがある。だから、もの(マテリアル)間のインターフェイスは、それぞれの専門家が丁寧に調べていって、その個性を明らかにするしかない面がある。それを「もの—もの」のコミュニケーションと呼ぶのは決して言葉の乱用ではないと思う。

以上のことを踏まえたうえで、理工系学生にもやはり対人的・対社会的センス、つまり「人—人」のコミュニケーションを身につけてもらいたいし、それが当センターの事業の重要な一部だと考えている。

参考文献

1. (1)関係性のデザイン：つくることから育てることへ、門内輝行、設計工学シンポジウム「関係性のデザイン：つくることから育てることへ」講演論文集、日本機械学会、p.2(2004)
2. 門内輝行、同、p.4.